

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

第8回 安息日が神の民に残されている

第4章①節から⑬節 「神が安息の中でのみ告げられること」

- ①だから、神の安息にあずかる約束がまだ続いているのに、取り残されてしまったと思われる者が、あなたがたのうちから出ないように、気をつけましょう。
- ②というのは、私たちにも彼ら同様に福音が告げ知らされているからです。けれども、彼らには聞いた言葉は役に立ちませんでした。その言葉が、それを聞いた人々と、信仰によって結び付かなかったためです。
- ③信じた私たちは、この安息にあずかることができるのです。
「わたしは怒って誓ったように『彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない』」
と言われたとおりです。
もっとも、神の業は天地創造の時以来、既に出来上がっていたのです。
- ④なぜなら、ある箇所では七日目のことについて、「神は七日目にすべての業を終えて休まれた」と言われているからです。
- ⑤そして、この箇所でも改めて、「彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない」と言われています。
- ⑥そこで、この安息にあずかるはずの人々がまだ残っていることになり、また、先に福音を告げ知らされた人々が、不従順のためにあずからなかったのですから、
- ⑦再び、神はある日を「今日」と決めて、かなりの時がたった後、既に引用したとおり、「今日、あなたたちが神の声を聞くな、心をかたくなにすることはならない」とダビデを通して語られたのです。
- ⑧もしヨシュアが彼らに安息を与えたとするのなら、神は後になって他の日について語られることはなかったでしょう。
- ⑨それで、安息日の休みが神の民に残されているのです。
- ⑩なぜなら、神の安息にあずかった者は、神が御業を終えて休まれたように、自分の業を終えて休んだからです。
- ⑪だから、私たちはこの安息にあずかるように努力しようではありませんか。さもないと、同じ不従順の例に倣って墮落する者が出るかもしれません。
- ⑫というのは、神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、

精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。

⑬更に、神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、私たちは自分のことを申し述べねばなりません。

(第4章①節~⑬)

この講話は1996年8月10日（66歳）に行われました。松山幸生先生もお生まれは1930年です。1945年は、先生は15歳でした。

8月、今年は割り合い涼しい日が続いていますが51年前の8月は非常に暑い日でした。特に8月6日は朝からとても暑かったし、8月9日も非常に暑い日だったことを覚えています。これは原子爆弾が広島、長崎にそれぞれ投下された時なのです。

そうした8月を迎えて、私どもの教会では特に平和を覚える月として、特別な祈りの時を持っています。平和と言うことを特に考えたい、そんな月であることを考えます時に「平和」と訳すことのできる「安息」という言葉がもっている意味を、やはりもう一度考えていかなければならないとを思いながら、この第4章の①節から⑬節までの御言葉を考え、味わってみたいと思ったわけです。

ご承知のように、この第4章の①節からは前回学びました箇所、⑦節以降の詩篇の御言葉について、更に説明を加えているところですから、前の事柄との連携の中で取り上げることができると思います。

特にこの先の⑭節からは「偉大な大祭司イエス」との小見出しがついていて分かりますように「大祭司キリスト」論という重要な新しい内容が語られていくわけです。

そういう大事な内容を展開するに先立って、神の御言葉に聞き従うこと、それが本当に私たちにとっては大切なのだ、ということをもう一度確認するために、この本日の箇所が記されていると言ってよいだろうと思います。

多少、そのような意味で私たちへの警告、あるいは勧告的な内容を表現するために、4章の①節ではその終わりに「気をつけましょう」という言葉が置かれているのです。

更に、この⑪節のところ、読んで気がついた方があるだろうと思いますが、中ほどには「だから、私たちはこの安息にあずかるように努力しようではありませんか」とあり、「気をつけましょう…そして努力しましょう」と呼びかけているのです。

⑬節にはそのことふまえて、この神に向かって

「私たちは自分のことを申し述べねばなりません」ということが書いてあります。

「だから私たちは、それができるように先ず備えをしていきましょう」ということが、この第4章の①節から⑬節までの御言葉を味わっていく時、基本的に語られている事柄として受け止めることができるだろうと思います。

第①節、②節

「だから、神の安息にあずかる約束がまだ続いているのに、取り残されてしまったと思われる者が、あなたがたのうちから出ないように、気をつけましょう。」というのは、私たちにも彼ら同様に福音が告げ知らされているからです。けれども、彼らには聞いた言葉は役に立ちませんでした。その言葉が、それを聞いた人々と、信仰によって結び付かなかったためです」

(安息に預かるという約束の成就には、福音を信仰をもって真剣に受け止められること)

「福音が、信仰をもって真剣に聞かれ、受け止められたかどうか、実は、神が与えてくださった『安息にあずかるという約束』が成就するかどうかの別れ道になります」
そのことに先ず心向けましょうと言うのです。つまり、神が語られた言葉が、その人自身と結び付いていく時には、その人が今までとは全く違った新しい存在として変えられ、新しくされて行く、ということがここでは語られているわけです。

私たちが先ず御言葉を聴く、更にその聖書箇所を学ぶということを繰り返していく理由の一つが、その御言葉を聴き、それによって新しくされ続けていく。別な言い方をすれば、神のものとして絶えず造り変えられ続けること、そのことが実は「安息」に入るための基本的な条件だということです。福音は、信仰によって受け止められることによって初めて、生きて、力を発揮するものになります。

「福音というのは語られればよいというのではなく、あるいは聴かせればよいというのではなく、そのことによって新しい生き方が始まって行くことと結び付かなければ何の意味もありません」と述べられ、「そうならないように気をつけましょう」と言っています。

イスラエルの人々は神から永遠の安息を約束されていましたが、彼らは神の御言葉に、ただ神の御言葉だけに聞き従うことをしないで、自分たちの思いや、自分たちの願いを先行させたために、「神の安息」に入れませんでした。そんな伝え方をしているのです。

ここで言われている「神の安息」とは勿論約束の地カナンを指していますが、その地に、彼らは入れませんでした。それを「神が与えてくださると約束した安息の地カナンを『得ることが』できませんでした」というように語っているわけです。だから、私たちは信仰によって、この安息と自らとを結び付けていくことに心に向けてゆきましょう、というのが②節あたりで強調している一つの特色ある表現だと言ってよいと思います。

何でこんなことが始めのところに書かれたかという、前から何回か申し上げていますように、丁度このヘブライ人への手紙が書かれた一世紀の終わり頃、教会は迫害の嵐の中に置かれていました。そして彼らにとっては、そのような中で現実を見つめる時に、目に見える形で神の約束が一向に実現していないことに非常に心が揺さぶられ、神の言葉に対する一種の絶望感をもって「信じているだけではどうも安心ではない、何かプラスアルファが必要ではないか、もっと具体的で確実だと思えるものはないのか」ということに心

が向いていったのです。

イスラエルの人々があの荒野の真っ只中で、モーセが神の山シナイ山に登ってしまい、戻って来ない。具体的な指導者が欠落している状況に見えた時、彼らは自分たちが今、外敵に襲われた時にどうしようということに心を傾け、自分たちのために金の子牛を造った。要するに、目に見える具体的で役に立ちそうな何かに心が動いて行く、そういう人々はいつの日も決して少なくないだろうと思うのです。229

このヘブライ人への手紙を受け取った当時の教会では、先ず第一にそのような安心できそうなものという意味で、「異教の神々」が彼らの生活の中に座を占めるようになっていきました。人々をどんなことから守ってくれそうな輝かしい力を帯びる太陽、あるいは、すべてのものを包み込んでしまいそうな強い力を帯びる闇、というような自然現象が神として崇められたり、拝まれたり、そこに希望が置かれたりするようになったのです。

かつて遊牧生活からカナンの地に入ったイスラエルの人々が、農耕生活に初めて手をつけた時に、何が何だかさっぱり分からない現実の中で、見まわすとカナン人たちが自然神を拝み、あるいは農業神をうち立てて、それにかしづく生きざまを成すことにより、多くの収穫が上がるのだと信じていた。それに彼らも押し流されてしまったのと同じような状況が、正にこのヘブライ人の中にも起こって来ていました。即ち、何か自分たちの手近に頼りになりそうなものを探し出したのです。

キリスト教主義の学校の先生方の集まりでよく出て来ることなのですが「きちんと子どもを指導するのはむずかしいね」という話が出ます。それは、子どもが学校に来る時に交通安全のお守りを親が買い求めて与え、子どもも何の疑問も感じないでポケットや鞆の中に入れて来ることです。そんなことをすることが偶像礼拝なのだ、神を拝むことではないのだと、言いたいけれども、言い切れないところがある、と言うのです。

要するに、「神が守ってくださることは分かっているけれども、より具体的な自分たちの生活の領域では、自分たちのことは自分たち自体、即ち、知恵や技術、伝統や慣習等に基づく力で守らなければならないのだ、という発想が、私たちの中にも全くないとは言いきれません」という打ち明け話です。

それは、「日本の国の自衛権」などという問題もそうだし、「安保の問題」もそうです。正に、自分たちが外敵から攻められた時、自分たちの安全を守るためには、この世の力が攻めて来るのだから、それに対抗できるこの世の力が必要なのだ。そういうものによって守るしか、身を守る方法がないのだという考え方は、キリスト教国と言われている国々の中にもあります。現実にピューリタンとして新しい国を建てたアメリカは、何を隠そう、世界の中では一、二を争う武力をもった国、戦力をもった国です。交戦力の大きな国ということになっているのです。そうすると、ピューリタニズムとは一体何だったのかということになるわけです。

私たちはそういうこの世の現実と、神の御前に生きるという神の現実との狭間で、さまざまな形で自己弁解しながら、いろいろなこの世の知恵を導入して身を安全にしていく。そ

の安全に囲われる中で、初めて安心して信仰生活を送れるのだというように自分を納得させていく。そういう在り様が何時の間にか定着してしまっているのですが、当時のヘブライの人々が集まっていたこの手紙の対象になっている部分も同じような考え方の中にあっただのです。²³²

この手紙を書いている人は、そういう意味で「彼らを異教の神々と何とか対決させていかなければいけない」気づき、言い換えれば、「目に見える頼りになるものに心が奪われている態では、目に見えない神を見ることはできないということを訴えなければいけない」と考えたのです。

更にもう一つは、「自分が神と結び付いていることを何とか具体的に自分自身で実感して生きたいという願い」これはいろいろな意味で出て来ます。

例えば、東ヨーロッパの国々、あるいはロシア、その周辺の国々は今でもオーソドックスチャーチ、正教会でもって信仰をしているのです。そこにはギリシャ正教あり、ローマ正教あり、ユダヤ正教あり様々な正教がある。そういうキリスト教は、自分が神に守られていることを具体的に自分自身に印象付けるために「イコン」（キリストの肖像を書いた小さな絵）をすごく大事にして、それを持つことによって自分は守られていると考えました。言い換えると、御札のような、免罪符のようなものとしてイコンが自分たちの生活の中では欠かすことのできないものになっていきました。

ある信仰深い家庭では、戦いの時、敵の弾が飛んで来て命が危うくなった時に、このイコンがその弾を避けてくれて、先祖は死ななかつたのだというような言い伝えを、弾の跡が残っているその「イコン」を指し示すことによって証し、だから神は確かにあなたを守っていてくれるのだと、子どもたち、子孫たちに語り伝えていったようです。

正に、そういう目に見える何かが、信仰を保ち続けていくためには欠かすことができないのだと考えています。²³³

当時、ヘブライ人への手紙を受け取った人々によって構成されていた教会も同じようにラヴィたちが定めた様々な掟を完全に守ることによって、私たちは神から守られている、支えられているのだという確認と確信とをもち「律法の行いによって、私たちは神の救いを具現することができるのだ」という考え方がだんだん重んぜられるようになって来ました。

つまり「唯、福音が大事なのである」という信仰ではなく、その福音は、神の御言葉よりもラヴィが定めた掟に従う時に、より確かなものになる。これ程まで掟なる言葉に従い得ているからこそ、救いが今ここにあることが認められるのだ、というような外的な要素によって、自分の信仰を補って行こうという動きが生まれて来ていました。結局、そういう風に具体的に自分たちが何か手にしたり、行ったり、目で見たり、図ったりすることができるようなものがないと安心できない、そう感じなければならぬほど厳しい現実の中で当時の教会生活は営まれていたのです。

そういう状況に対して、このヘブライ人への手紙の著者は、「ラヴィが定めた掟が信仰に

よって御神の言葉と結び付かなければ、どんなにその言葉に信頼していても意味がない。あなたがたが今、神の御言葉と結びついているつもりであっても、あなたがたの生き方そのものが信仰ではなく律法の行いであったり、あるいは豊かな繁栄という具体的な賜物であったりして、それらが神の御言葉と結びついて安全を保障してくれるような状況ではないのです」と告げています。²³³

「それでは、あなたがたは本当の神の安息には入れないのですよ」と①節、②節では一所懸命になって呼びかけるわけです。

第③節の前半、

「信じた私たちは、この安息にあずかることができるのです。わたしは怒って誓ったように、『彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない』と言われた通りです」

詩篇を引証しながら、これを書いてゆきます。

神はイスラエルに対して、安息に入らせることをしなかった。まあ、出エジプトの出来事を取り上げて、そういう状況を引き起こされたのは「実は、安息にあずかることができる可能性をあなたがたに残すためだったのだ」というわけです。

これを大変詭弁だとある人々は言うのですが、結局、神が与えた安息の地にイスラエルの人々は約束通り入ることができたのです。けれども、それは彼らにとっての究極的な安息ではなかった。それで、そこでも彼らは異数の神々を拝み始め、神を試み、そして神から離れて行った。

言い換えるなら、「神が与えてくださったはずの安息が彼らの裡にはなくて、様々な手立だてを労することによって、自分自身が自己防衛をする以外なかった。それは彼らが真の信仰を持っていなかったからなのだ」という断定をする人々がいるのです。こういう断定をされると、私たちはすごく怖いのです。「私たちが何があっても安心できないのは『あなたがたに信仰がないからです』ということと言われてしまうのですから」

正にあの「ガリラヤ湖上で激しい風に悩まされた船の中で、弟子たちがイエスに向かって『あなたは、私たちが死んでしまっても構わないとお考えなんですか』(マルコによる福音書4章38節)と言っている状況と同じです」

イエスが共にいてくださることは、彼らにとって守られることの保証にはなっていないのです。嵐が、実際に静められなければならないのです。イエスがいくら共にいてくださっても、彼らは「私たちは死にそうです」と訴えています。自分たちがそこで死にそうだと考えていること自体が不信仰なのだ、ということが彼らには全然わからない。むしろこの現実の中では船の中で眠っているイエスこそ悪者なのだ、こんなに私たちが困っているのに知らん顔している、それでも私たちの指導者なのですか！と彼らはイエスに詰め寄るわけです。

「そういう私たちが求める平安と、神が既に与えてくださっている平安とのギャップ」が、私たちの生活の中にも沢山所々で頭を持ち上げてきます。それをこのヘブライ人への

手紙の中では、「あなたがたに神が与えてくださった『安息を与えるという約束』をしっかりと見ていないからなのだ」と言わせているのです。「神の安息が既に他の人々のために用意されている、そういうプロセスを得させるために、イスラエルの人々を敢えて神の永遠の安息には入れなかったのだ」と受け取れるようにここでは書かれているけれども、「不信仰に対する神の厳しい裁きを、あなたがたはしっかりと受け止めていないではありませんか」と言って④節につなげて行く、すごく大切なことがここには書かれているわけです。²³⁶

第③節の後半から⑦節

「もっとも、神の業は天地創造の時以来、既に出来上がっていたのです。なぜなら、ある箇所で七日目のことについて『神は七日目にすべての業を終えて休まれた』と言われているからです。そして、この箇所でも改めて、『彼らを決して私の安息にあずからせはしない』と言われています。そこで、この安息にあずかるはずの人々がまだ残っていることになり、また、先に福音を告げ知らされた人々が不従順のためにあずからなかったのですから、再び、神はある日を『今日』と決めて、かなりの時がたった後、既に引用したとおり、『今日、あなたたちが神の声を聞くなれば、心をかたくなにはならない』とダビデを通して語られたのです」

この中で私はイエスが語られた一つの警えを思い起こします。ルカによる福音書⑭章⑮節のところの「大宴会の警え」です。²³⁶

「食事を共にしていた客の一人は、これを聴いてイエスに、『神の国で食事をする人はなんと幸いなことでしょう』と言った。そこで、イエスは言われた。『ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に「もう用意ができましたからお出でください」と言わせた。すると皆、次々に断った。最初の人、「畠を買ったので、見に行かねばなりません。どうか失礼させてください」と言った。ほかの人、「牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか失礼させてください」と言った。また別な人、「妻を迎えたばかりなので行くことができません」と言った。僕は帰って、このことを主人に報告した」

ここまでのところを読んで見ると、神が大宴会の招待状を送っておいたのだけれど、彼らはその日のことを自分の生活の中できちっと位置づけしないで、ころっと忘れて自分たちの計画を先行させていた、ということがわかるのです。-

「用意ができましたから」というのは約束しておいた日が来たので、神がその人々に案内人を送った。ところが、彼らはその宴会のことなどすっかり忘れて、自分がやりたいことを行うために、この時間はきっちりと埋め尽くしていたので「神の御前に出てゆく時間などもうなくなってしまっています」と断っているわけです。

「神の約束を信じる」ということは、そういう意味では大変厳しい言葉のようですが、実は、何もしないでその日を待つことなのです。そこに何も予定を入れなくてその日を待つことなのです

す。ところが「その日までには時間があるからこれをやろう、あれをやろう」と言うのが私たち人間の思惑なのです。そうしているうちに、その日、その時間の寸前までそれを行うことにしてしまい、とうとうその宴会までに着くことができなくなってしまった。言い換えるならば、彼にとっては神の大宴会に列席するよりも、今、自分がやろうとしている具体的な自分の繁栄のための仕事の方が大事だと考えたというのです。牛を見て来ること、買った畑を自分自身で確認しに行くこと、あるいは嫁を迎えることの方が、神が招いてくださった大宴会に出ること以上に大事なことである、緊急なことであると判断した、そういうことになるのです。

ところがその後、僕は帰って、このことを主人に報告すると、家の主人は怒って、僕にこう言ったのです。「急いで町の広場や路地に出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい」と。言い換えるならば「誰もが顧みてくれないで、顧みてくれる人を求めている人々に声をかけなさい。そうすれば彼らはすぐに応じるでしょう」と家の主人は言ったというのです。

勿論、ここではルカ独特の皮肉たっぷりの表現があるわけですが、健全な人間は自分で何かできるから、神の声を聞き、従うという必要を感じていない。そしてそういう人々は、そのような弱さをもった人々を一人前だと思っていない。つまり、人から人とは思われてはいないような存在が神の言葉に喜んで応じる者だろうから、自分を義人だと思ふ人々は神の言葉に答えようとはしない。しかし、自らが罪人であると感じ、心の内に痛みを覚えている人は、神の呼びかけにすぐに応じることができるのです。「人の子は、健やかな者のために来たのではなく、病める者、いたずきを負っている人のために来たのだ。あるいは、滅びの状況の中で悩んでいる人々を救うために来たのだ。」というイエスのお言葉は正にそういう形で具現化してゆくわけです。

ヘブライ人への手紙の中でもそのような事柄を、旧約の出来事との兼ね合いの中で語っていくわけです。イスラエルは神に招かれ、そしてその招きに応じてカナンの地に向かったしかしそこで神の約束を待ちきれなくなり、自分たちで神の言葉に背く行為を行なっていたのです。文化を作り、文明を作り、王を立て、遂に自分たちの欲望を満たすために戦いを挑み、あるいは勝手に同盟を結び、国をめちゃくちゃにしてしまった。神御自身を崇めるよりも自分たちの繁栄をひたすらに求め続けていった。その結果、もう神はそんな彼らに安息を与えることはできないとお考えになった、と、そんなことを通して語っていくわけです。

(1996年から四半世紀経過したした今はこの現象は激しくなっています。現実を直視され行動し続けられた松山先生の予感が進んでいます)

そして、この③節の後半から「安息」という問題をすごく厳しい形で語っていくのです。神は六日間ですべての創造の業を完成なさった。そして七日目以降は神は永遠の安息にお入りになり、二度と創造の業は行われなかった。そういう捉え方をしているわけです。そして神は、その時にお入りになられた安息を「今」に至るまで継続しておられる。その「今、神がもっていらっしゃる安息」に、私たちを招いていてくださって

るのです。今、神が用意していらっしゃる安息に連なるために、何をしたらよいのか、それには自分たちも業を終えて休むことが必要なのだ。²⁴⁰

今日の社会とか私たちの生きている現実、教会をも含めてですけれども、この生活している現実を考えていくと、私たちはいろいろな目標を立てて、その目標達成のために一生懸命励みます。ある意味では、ノルマを自分自身に課して、そのノルマを果たすことのために必死になる。ノルマを自分に課すということは、この現実の世界の中では当然あってしかるべきだと考えるわけです。しかもノルマである以上、出来ることをノルマにしたのでは意味がないわけですから、「自分が背伸びをしてやっと出来るような高い目標を基準にして、自分にノルマを課していくわけです。そしてそのノルマが達成されることこそが、私たちの人生が充実して行くことなのだ」と考える。そういう生き方を私たちはしているわけです。」

ところが、それと並行してですが、そういうノルマに押し潰されて、精神医学的な用語を使えば、そこから遁走している人間がどんどん増えて来ている。言い換えると、精神的にもう耐えられなくなり、異常を来した人間がどんどん増えて来ているというような状況になっているわけです。

例えば、私たちの目に見える形で捉えてみると、お店とか、デパート、企業が、売上高を一つのノルマにしているわけです。どれだけの売り上げがなければいけないとか、それをまた色々なマスコミが煽るわけです。前年比で何パーセントの増とか減とかいうわけです。そして、今は成長しているのか、衰退しているのか、ノルマは達成されているのか、いないのかということがとてもを気になるように報道するわけです。

でも良く考えてみると、デパートの売り上げが去年の同期と比べて落ち込んだということは、私が今、生きているということとどう結びつくのか、たいして関係ないのです。しかし、そういうことが公の機関を使って報道されると、今はデパートの売り上げが落ち込んでいて不景気な時代なのだを知る、ですが、実際の自分の生活はどうなっているのかな、と考えるとそんなに違っているとは思わないのですが、不景気のような顔をしないといけないということになって、皆暗くなっていくわけです。やがてこの不景気を何とか打ち壊さなければいけないのだと言い始める。そうするとまたその上のノルマを作ってまた頑張ろうとするというようなことが「一般企業の中に起こってくる」わけです。

あるいは、今の社会の中で生きていく時、「一般家庭の中」で生活していくためには、これこれの支出が必要だから、それに見合う収入がなければならぬ。その収入が得られているか否かが大事な問題で、収入が達していないなら、皆一所懸命力を出して働かなければならないということになって、そういうことに振り回されてしまう。

「学校に行けば成績」です。「駄目じゃない、もっといい成績取らなければ、いいところに行かれないわよ」ということになる。あるいは大学に行けば「もっと成績を上げておか

なければ就職できない」ということになる。だから何時までたっても「数字が人間より上にあって、人間を支配する」それがいわゆる「ノルマ社会」だと思うのです。

そういう社会の中に生きていますと、いつか知らぬ間に本当に大事なものはそのノルマをこなすことのできる力なのだと考え始める。言い換えると「休まず働き、精勤して励むことが一番大事なのだと考え始める」のです

つまり、ノルマをきちんとこなせる能力のある人間が一人前。こなせない人間はやはり一般よりも少しレベルの低い人間なのだ、という「数値化して評価することをやってしまう」わけです。²⁴³

ですが、神の御前に生きていこうとする時に、私たちはこれこれの事柄を十分に成し終えましたから、休みをいただきますという休み方では、「聖書でいう安息にはならない」。ノルマを達成していようがまいが、「神が『今、休め』と言われたから休む」、仕事が終わったので一息つくのではないのです。仕事の最中かも知れないけれども、「神が今、休めと命じ給うたので、自分の仕事をしないている」それがここでいう「安息」という言葉の真意なのです。

しかしながら、これを実行するのはすごく厳しいことなのです。自分の仕事をしないていること自体が、今日の社会では罪悪のように考えられることがありますから、|

「どうして何もしないんですか、健康な体をもっているのに、それだけ時間があるのに」とか言われるのです。ところが、すべての力、全能の力をお持ちになっていらっしゃる神が七日目には休まれた、このヘブライ人への手紙流に言うならば七日目以降はずっと休んでいらっしゃる、働かれない、「だから、働かないでいることこそが大事なのだ」そういうメッセージがここでは成されているわけです。

「神がみ業を終えて何もなさらないとお決めになったように、私たちも自分の業を休む、中断かもしれないけれども何もしないでいる、そういう休みを取ることが大事なのだ」と言っているわけです。

この辺をきちんと教会で説教すれば「日曜日は色々おありでしょうが、神の御前に出て来ることが大事ですから、どうぞ礼拝にお出てください」なんて余計なこと言わないで済むのです。「休め」と神が言われたから休むのが正しい生き方なのです。自らの仕事は色々あるだろうけれど、神はそんな仕事をいったん横に置いて休みなさいと言われていたのですから、「休みなさい。そして教会に来なさい」と言えるのです。

「私たちの休みというのは、何もしないということではなく『神と共にいること、礼拝です』安息の源である神と共にいることが私たちの務めなのです」「神は、今日、私たちに安息をくださるうとして、『一切のことを置いて教会に来なければなりません』と神が仰っているのだから」と言えればいいわけです。けれども、なかなかそう言える状況にないのが今日の現実です。

さっき、イエスが語られたルカによる福音書の大宴会の譬えを引用しましたが、マルコによる福音書の中でもイエスは同じような話をしているのです。これは大宴会の譬えではないのですが、弟子たちを選んで、二人ずつを一組にして町に派遣なされた。彼らが町々村々を歩き、イエスが言われたように福音を宣べ伝えて帰って来た。そしてイエスに状況報告をした。(マルコによる福音書6章⑦・⑫・⑬節)。

その時にイエスは彼らに対して何て仰ったかと言うと、「さあ、今あなたがただで人里を離れた所へ行って、しばらく休むがよい」(同、6章⑳節)²⁴⁶

「何をしてきたか、どんなことができたか、どんな人々と出会ったか、どんな立派な業をなし得たか、などということをおあなたがたが考える必要のない、人里離れた、そんな何にも役に立たないところに出掛けて行って、神の前に静まりなさい。神と一緒にいなさい。その時こそ、あなたは本当にしなければならないことが何であり、神が本当に為させようとしていることが何であるかを見いだすことができるだろうから。余計な功名心を持つことなく神の御前に静まりなさい。そのような『安息』をおあなたがたが得ることができなかつたならば、町々村々を歩きめぐったことは無駄になる」イエスはそうお考えになった。

教会も同じなのです。一生懸命福音を宣べ伝える、けれども時にはイエスの様に人里離れた寂しいところに行って、ただ神とだけ一緒にいる祈りの時間がなかつたならば、教会の業は虚しくなる。意味を失う。

ところが一方で、教会は信徒のために勤勉でなければならない。伝道のために熱心でなければならない

い。だから人里離れた静かなところにおいて、時間を費すなどということはとんでもないことだ、それは時間の浪費だ、と考える熱心で立派な伝道者がいるのですけれども、私は立派じゃないから、なかなかそう考えないのです。²⁴⁷

神と一緒にいる時間がなかつたら、「語るべき言葉」は自分には与えられないのです。

「成すべき業」は示されないのです。自分たちが立てた計画だけが先行して、そのことだけで坂道を転げ落ちるように、どんどん時を過ごしていかなければならないのです。

「神の安息は、そういう意味では、あえて私たちが日頃やっていることを全部止めて、ただ神のことだけ思う時を作る、そこから生まれて来ることだと思うのです」

「この考え方は『ユダヤ教』の中でも非常にはっきりと出て来るのです」

ユダヤ教の人々は安息日には断食はしないのです。あるいは悲しい出来事があって弔いが行われた後でも、安息日は喪に服さないのです。「サバス」と呼ばれている安息日は、神と一緒にいる一番嬉しい時ですから、自分が苦しむこと、悲しむことなど一切捨てて、喜びをまとう時でなければならないと考えます。だから、死者を送ったすぐ後でも安息日が始まると、にこやかにして、それも朗らかに過ごすわけです。断食期間が続いていても、ちゃんと安息日には食べるのです。それも人を呼んで宴会を開いて食べるのです。こういうユダヤ教の習慣を形だけ見ていると「なんだ、お祭りじゃないか」と思いますけれ

ど、その精神は何かと言うと、「安息日は神とだけ一緒にいる時なのだから、一番嬉しい感謝の時なのだ。だからその時を祝わなければならない、喜ばなければならないのだ。そのためにそれを妨げるような一切のものを私たちの生活の中から排除してゆくのだ」という発想があるのです。これは大切なことだと思います。²⁴⁷

日曜日の礼拝に、「私たちはこの時こそ、神とだけ一緒にいられる自由な時間なのだ、仕事も家事も何もしなくてもいい時間なのだ、だからこの日を恋こがれ、待ち望んで主の日の礼拝に行く」、なんて言う信徒がいらしたらすごいと思います。

けれど大方は、日曜日になったから、あれもある、これもあるけれども、先ず神の御前に出ることが大切だと言われているから出ましようと思いを決めて、日曜日の礼拝に出るのです。喜びの日だから、一番嬉しい日だから、私は晴れ着をまとして神の前に出ましようなどという、ことにはなかなかならない。そういう発想の違いが、この「安息」という言葉の中に非常にはっきりと出て来るのです。

例えば、「神様は私たちを、何もしなくてよいという喜びの中に招いておられるけれども、私にはあれもある、これもある、これもしなければならない、けれども、今日は神様、せっかくあなたが造ってくださった主の礼拝の日ですから、私は我慢をしてここに来ています」と言う。

そんな風をしていると、その後当然「だのにあなたは、何も私に恵みをくださいません。あの時休まないでやっておけばこんなことにならなかったのに、やらなかったためにこんな目に遭っているのです。それでもあなたは私たちの救い主ですか」などと言いたくなるのです。正にこれは、あのユダヤ人たちが出エジプトの時に考えたことと同じです。

「神と一緒にいる喜びの中で彼らが生活できるように、神がせっかく砂漠に招いてくださったのに、彼らは今、食べること、今、生きること、今、楽しむことの達成のみに熱心だったので、「神は何もしてくれない、神は私たちを砂漠で苦しめればと思って呼び出したに違いない」などとかんぐり始める。神が共に喜ぼうとして、ここに招いてくださったのだという発想が欠落したところからは、どんなに熱心になっても、頑張ってみても、神に対する本当の感謝は生まれて来ない、何かとびきりの出来事が起きないと喜べないのです。²⁴⁹

また、例えば、教会に皆集まって礼拝していた、そうしたら大きな地震が起きて教会の周りの家は皆潰れたけれども教会だけは潰れなかった。「ああ教会に来ていてよかった、神は私を守り『安息を与えてくださった』」と言うかもしれない。

しかし、それは神がお考えになっている安息とはすごく違う、自分にとって都合が良かったというだけで、安息でも何でもないので。

そういう意味で「神はまだまだお仕事がおできになったのに、七日目からはずっとお休みになっている」というこのことを私たちはどう捉えて、どう生きて行くのかが、やはりとても大事なことなのだなと思います。

そして、ヨシュアによってヨルダンの川を越えて、カナンの地に入ったイスラエルは、一応神の安息の地には入ったけれども、それから400年経っても、もっと経っても、安息は得られなかった。その先のダビデは王位に就いて国を治めた時、こんな詩を謳っているのです。

「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、心をかたくなにはならない」。

「未だ、神の安息は実現されていない、成就されていない」と語っているわけです。そして、ヨシュアの時から安息が与えられているとすれば、神は後になって「今日、あなたがたが

御声を聞いたならば…」などとおっしゃるはずがなかったのです。

ダビデにそう言わせているのは、まだ「安息は完成していないのだ」ということをここで語っているのです。

第⑧節、⑨節、

「もしヨシュアが彼らに安息を与えたとするのなら、神は後になって他の日について語られることはなかったでしょう。それで、安息日の休みが神の民に残されているのです」

安息日の休みが尚、残されているのは、「正に、神があなたがたにその安息を与えてくださろうとして、安息がまだ神の御許に留保されているから」なのです。

第⑩節、

「なぜなら、神の安息にあずかった者は、神が御業を終えて休まれたように自分の業を終えて休んだからです」

要するに、神が与えてくださる安息に入るためには、私たちが業を止める決断を準備していなければ、実際に、神が安息を与えてくださる時に、それを得ることができずに、「断って自分の仕事に行ってしまった、あの招かれた人々のようになってしまおうだろう」ということをここで語っているわけです。²⁵⁰

「自分の業を休む」、一番むずかしいことです。でも、私たちにとって大切なことはこの世で名声を博したり、豊かになったり、成功したりすることではない。神の招きに応じて神の安息に入ることなのです。だとするならば、「この世がどうであろうと、常識がどうであろうと、そんなことに振り回されているのではなく、神が私と共にいてくださるという平安の中で今を生き、その恵みがあなたにも残されているのだということを隣人に伝えてゆく、そのことの中で本当の安息が得られるのではないのでしょうか」

「安息を得ていない人間が安息を語っても、それは安息にはなりません」というのが、やはりこのヘブライ人への手紙の中で訴えられている点の一つなのです。だからあなたがたは異教の神々や掟を守ることによって自分自身が完成してゆくような錯覚に落ち込んで

はなりません。あなたがたが完成するのではなく、神があなたがたと一つになってくださることこそが、あなたがたの究極の完成なのです、これが福音なのです。

私たちは様々な欠点や欠陥という破れを持っているけれども、神と共に安息にあずかることがゆるされ、私たちが業を止めて神の前に膝をかがめた時、神はすべてを良きものに変えてくださる、祝福の材料として生かしてくださる、それは私たちに与えられている恵みなのだと感じることができるようになる。

「だから、そうなるまで神のみ前で休んでいなさい」と言われているのに、頭で分かって心が納得しないうちに私たちは立ち上がってしまいきますから「こんなはずではなかったのに」という呟き言葉が出て来るのです。²⁵¹

日本民族というのは頭がいいですから、どうも頭ですぐ納得するし、心ではなかなか納得しないのです。

「ああ、私は神と共にあって、神様は、すべてのものを大きな恵みと祝福にしてくださっている。有難いことだ。」とそこでは思うのですが、ちょっと経つと「でも、あの人の方が遥かにすべてのことに対して立派なことをやっている。私にはこんな欠陥があるからうまく行かない、これさえ克服できればいいのに。」とまたグチをこぼし始める。

だから真の安息にならないのです。神の御前にまどろんでいなかったならとか、あの時あんな休みを入れないでことをしないで、せっせと頑張っておけば、今頃はもうちょっと楽ができたのにと考えてしまう、堂々巡りを、何時でも繰り返しているのではないのでしょうか。

そのことに対してこのヘブライ人への手紙の中では、「あなたがたは大事なものは何かをよく考えない限り、神の御言葉への不従順が、あなたがたを安息から引き離し、墮落させてしまうのです」と結んでいるのです。

第⑩節、

「だから、私たちはこの安息にあずかるように努力しようではありませんか。さもないと、同じ不従順の例に倣って墮落する者が出るかもしれません」

「だから、私たちは神の安息にあずかるように」ということは、神だけを目当てにして、他の一切をかなぐり捨てることができるように、「努力しようではありませんか」ということです。努力しないと人間にはあずかれないのです。どうしても自然にはそうならないのです。本来は自然に神を讃え、神と共に喜べるように創られたのですけれども、どうも私たちの心はだんだん神から離れてノルマに傾いていき、ノルマが神になりましたから、ノルマを果たすために努力をすることが大事だと考えるようになりました。そこで「私たちは努力をしないと仕事を休むことができなくなりました」。

そんな努力もしないで仕事も休まないで墮落して、どんどん駄目になりかかると、神は警告を与えてくださって「しばらく休め!」とちゃんと休ませてくださる。

私は学校勤めをしていた頃、二月位になると何時も決まって一週間位すごい熱が出て動けなくなり、休ませられたのです。「やあ、また神様に叱られちゃった」と思うのですが、次の年も二月はちゃんとそうなるわけですから、初めから休みの日程用意しておけばいいのですが、やはり二月になって休ませられる日までは頑張ってしまう。そしてまた大体入学試験の後くらいにはばーっと熱が出るのです。そういう馬鹿真面目の愚かさを繰り返していたのです。

神の安息になかなか入れない例だと思うのですが、そういう自分がやはり、それでも尚、神の安息が、この私にも残されていることを信じるからこそ、神の御前に生きることがゆるされているです。こんな者を神は顧み続けていてくださることを信じるからこそ、私たちは神の御前に生きることができるのだらうと思います。²⁵³

それは正に、神が私たちにお与えくださったお約束を完全に遂行されるために、安息にお入りになって、今尚、安息を継続していてくださる。何もしないでじっとしていてくださる、終わりの裁きの日を待っていてくださる。そのことこそが正に、私たちに神の恵みを与えてくださるうとして、御自分は行動されないという方法によって、私たちに福音を伝えてくださったことなのです。

「神の国に入るということは、あなたが何かできるからではありません、ノルマを達成したからでもありません、『神にすべてを委ね静かにしていただけるようになったからです。そのことが、あなたが神の国に入ることの証しなのです』その日が来るように私は祈って静かにしています」というのです。

「神は今、何もしないでおられるわけです」何もされないのです私たちは我慢ならなくて「神様がなさらなければ私がやってやろう」と考える、それを「人間の業(ごう)」と仏教では言うのです。聖書的に言えば「罪」なのですけれども、その罪が私たちから消え去ることがないので。何時でも、神がやったださらないので、不足があるから「教会」はこの時代の中で頑張らなければいけないと考える。

そうではないので、神は、私たちが安息に入るように招いてくださっているのに、私たちはその安息に入るのを喜ばない。神はそんな教会があくせくすることを憐れみの眼差しをもってじっと見ていらっしゃる。そして早くやめて安息に入ればいいのかと考えていらっしゃる。そういうふうはこの箇所を読んで見ると、「教会はもう一度自分の姿を見直さなければいけない

な」と考えるわけです。²⁵⁴

「御言葉を宣べ伝えなさい」というパウロの言葉は、本当にどういう意味なんだろう。「あなたが真実の安息を得て、その安息を宣べ伝えなさい」ということでなければならぬと思うわけです。

そういう私たち一人一人の在りようというものが、このヘブライ人への手紙の中ではもう一度さらけ出されて来るのではないかと思うのです

第⑫節、⑬節、

「というのは、神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。更に神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、私たちは自分のことを申し述べねばなりません」

終わりの二節は大変厳しい言葉で、その前の節を受けて書いていると捉えることができます。

「私がこんなに必死になって、あなたがたに『休みなさい』と言っているのは、神の御言葉がいい加減なものではないからです」。これは「両刃の剣」という言葉で書かれていますけれども、この両刃の剣というのは、当時彼らが生活をする中で何時でも身につけることのできた道具の中で一番鋭い道具、鋭利な道具なのです。切れ味が良くてどんなものでも刺し貫くことのできた道具、言い換えれば当時の社会、ユダヤ人の社会では神の前に犠牲を献げる時、その犠牲を二つに引き裂く時にこれを用いたのです。それほどに鋭い刃物であるわけですが、そんなに大きなものではなくて、小さなものであったようです。そんな両刃の剣というのがここに書かれているわけです。

神の言葉は、あなたがたが、常識的に考えたならば当然分離することができないと思われるものまでも分離することができる鋭い力をもって、私たちに迫って来るものなのです。例えば、私たちの内面的な生活においては、「精神と霊」はそんなに区別することが出来ないけれども、神はきちっとそれを引き裂かれるほどの力をもったお方なのです。言い換えると「関節と骨髄」というのは私たちが生きて行くための一番基本的なもので、これを切り離すなどというのは考えられないけれども、神はこれを切り離すことができるほどに鋭い刃物のような「神の御言葉」をもって私たちに臨んで来られるのです。そのようにこれは書かれているわけです。（これをいのちの御言葉として受け留めるためには、「安息の時」がどうしても欠かせません。森容子先生）

医学的に言えば色々なことが言えるかもしれません。関節の上には軟骨があって、その軟骨の中には穴が開いていて、その中に骨髄が通っていて、その骨髄の中には神経が通っていて、それは本当に細いものだ。そういうものがあるから関節がきちんと動いている。だが、もしもその軟骨が切り離されて、その軟骨の中の骨髄までも裂かれてしまったら、関節は何の役にも立たない石のかけらのようになってしまう。でも神はそれを引き裂く程の明確な力を持っていらっしゃる。まあ今日で言えば、電気メスなんていうものやレーザー光線なんていうのがあります。そういうものが、細いところを細分化して引き離してゆくような力をもった神の言葉は、私たちの奥の隅の隅までもきちんと見定められる、はっきりとさせることができる、そういうお力をもっている、それが神の御言葉なのです。そして、そういうことのために私たちは神の前に隠し事などとてもできません。

「すべてのものが神の目の前には裸であり、さらけ出されているのです」と⑬節には書いてあります。

私たちは衣装をまとうことによって、自分というものの存在を多少色々イメージアップすることができますけれども、神の前にはそんなことは何にも役に立ちません。日頃申し上げているような言葉で言えば、あなたがたの持っている資格とか門地とか名誉とか地位とか財産とかは一切、あなたがたを優れた者にする力はないのです。神の目の前には何の役にも立っていないのです。ただ、神の前にあなたがたがどう歩んでいるかだけが問われているのです。だから、私たちの全部を知っていらっしゃる神の御前で、自分自身をはっきりさせなければいけません。私たちはそのお方の御前で、ただ悔いなく折れて、憐れみを求める以外に道はないのです。神はそんな私たちを憐れんで赦してくださり、尚も安息に招くことのできる存在として私たちを捉えてくださるのです。²⁵⁷

だから、「折角くださろうとしている『安息』ですから、その日は、自分たちのやりたいことを一切やめて、それをお受けしようじゃありませんか」というのがこの4章の①節から⑬節までに書いている手紙の要旨であると思います。

「私たちは自分のことを申し述べねばなりません。」と結んでいますが、申し述べることは何一つないはずで。別な言い方をすれば、先程申しましたように、「私たちは神の前に出て、ただひたすらに悔いなく折れるしか道はありません」ということになる。神と私たちとの生きた関係が今ここではどうなっているのかが大変厳しく問われています。

そして、「できれば日曜の礼拝守った方がいいですよ」などと言っている牧師たちに対しては「あなたは福音を宣べ伝えていない」と神は告げるわけです。「福音を宣べ伝えるつもりならば、『神が休んであなたを待っているのだから、あなたも休んで神の御前に行きなさい』と言わなければいけない」。どうもこの世の兼ね合いの中で、そうまで言い切れない現実というのがあるから、そこをどう乗り越えたらいいか悩んだりする。

「でも、『この世は一瞬』であって、神がご支配なさる『安息の世界こそが永遠』であるとするならば、一瞬に過ぎ去るこの世のことで振り回されていていいのだろうか、ということがもう一度問われるべきではないか」と思います。²⁵⁸

ヘブライの人々に「あなたがたが異教の神々に近づいてみたり、あるいはラヴィの教えを守ることによって、自分が神の民としてふさわしいかどうかを再検討しようとしているのは、本当の神に出会っていないからです。本当の神は、働いたり苦労したりしている中ではおられないのです。なぜなら天地万物を六日間で創られ、後はずっと休まれているからです。だから、休まない限り神と出会えないのです」と言っているこの言葉はすごい言葉だと思うのです。

「休みを取りなさいと一生懸命勧めている聖書の教えは、面白いな」、と思うのです。「せっせと励みなさい、頑張りなさいという言葉はすごく心地がいいのです」。なぜかと言うと頑張ることは私たちは好きですから。ところが「頑張っても意味ないから止めなさい

い」という言葉は居心地悪く耳ざわりです。なぜなら、誇ることが何もなくなってしまうからです。「人が5時間働いたところを、私は5時間半働きました、5時間1分働きましたよと言って、多少は人よりましですと言いたいのですが、何もしてはいけないと言われたら比べる対象がなくなるのです。赤裸々な裸の自分しか残らないのです。そうすると赤裸々な自分はどんなに罪深く憐れな存在か知っていますから、どうもそこでは居心地悪くなって、やはり「働きたいです」と神に願うわけです。²⁵⁹

ですから、キリスト者は聖書の言葉の中では、パウロの言っている言葉「時がよくても悪くても福音を宣べ伝えなさい」の方が好きなのです。今は悪い時だけれど一所懸命やろう、私はこんなに一生懸命神の言葉に仕えているから、他の人よりもましなのだ。実はこのところが罪なのだといって宣教しているのですけれども、その自分が他よりはましなのだと言って宣教しているのですから、知らぬ間に嘘を語っているわけです。嘘には力がないのです、救いはそこにはないのです。「だから、そんなことを止めて休みなさい」というこの手紙の奨励は、生涯聴き続けていかなければならない奨励だと思うのです。

夏休みも取らないで働き続けて、頑張っていることは少しも偉いことではないのだなと思ひ、ひたすらに休もうと思っております。

今度の夏のキャンプでも、私は休み時間をたくさん取ろうと思っているのですが、「あなたがたは本気になって休みなさい」と言っているヘブライ人への手紙を読んでよかったなと思います。「本気になって休めるかな」と実験しようと思ひます。なかなか休めないで、今はポーズをとっているようですが、ポーズでなく休める時、それが本当にすべてを神に委ねていける時ではないとも思ひます。(松山先生のユーモラスなところ)

私たちは神に委ねることができず、自分の小賢しい知恵を働かせることによって、何か安全策を早く作れるのではないかと考えてしまう、そういう罪深さをもっています。それだから、「彼らは安息に入れなかった」と著者が語っている人間の姿と共通しているものを、私たちも持っていると言わなければなりません。

あなたがたはそうならないように一生懸命努力しなさい。何を努力するのか、励んで努力するのではなく、「一生懸命神が安息を取られたように、安息を取ることに務めなさい。休みなさいと言ってくださっているのですから嬉しいはずですがけれども、実は『嬉しいかどうか』が信仰の問題を問うている言葉ではないのかと思ひます」

今日の箇所はわりあい単純に一つのことを私たちに告げているのではないかと思ひます。

(霊的な安息)

多少時間がありますから、「安息ということのもっている意味」にどんな意味があるのかということをおつとまとめて終わりたいと思ひます。

先ず、神の安息に入るための約束は、まだ私たちのために残されています、と呼びかけます。その「神の安息」とは何かというと、「神を信じている人に与えられる霊的な意味での永遠の安息、ないしはシャローム」それが安息だ、そんなことが第③節の「この安息」

と書かれているところです。

あるいは「神を信じる者に与えられる安息」という表現で書かれていますから「霊的な安息」が第一番目に問題になるだろうと思います。

また⑥節や⑦節のところを見ると「今日」ということが語られながら、安息にあずかる人がまだ残っていると、色々な表現で安息ということが語られていますけれども、「かつてイスラエルの人たちは、与えられた約束の地カナンに入ったけれども、ここに入るだけでは本当の安息ではなかったのだということ」それが「第二番目の点で安息です。約束の地に入ること、神の招きに応じて自らの身を委ねることです」²⁶¹

「三番目には、本当の安息とは神が天地万物の創造の業をなし遂げられて、それから休みに入られた、何もしないことにされた。それが安息なのだ」。

そういう「霊的な安息」とか、「場所的とか領域的とか、そういう安息」という言葉と、「神が私たちに求めていらっしゃる絶対的な安息」、この三つの安息という言葉が繰り返し織物の縦糸と横糸が交差するように何度も出て来ていると思います。その安息に対して「福音を聞かされた人々は不従順のためにその安息に入れなかった」とここで言っています。²⁶²

「不従順のためにその安息に入れなかったという事柄の一つの形では、例えば、カナンの地に12人の斥候をモーセは派遣します、そうするとカナンの地を見て来た人たちは、「あの地は確かに良い乳と蜜の流れる地です」ということは共通して報告するのです。ところが10人の斥候はそれに付け加えて「あの地には先住民がいてとても力が強いのです。だからあの人々と戦って私たちは勝てるはずがありませんから、あそこに入るのは無理でしょう」とそういう報告をします。

ところがカレブとヨシュアという二人の斥候はモーセのもとに帰って来た時に「主の力によって私たちが進む時には、どんな先住民がいようと、あの地は神は与えてくださったのですから、私たちのものにすることができのです。だから、神が与えてくださった乳と蜜の流れる地に進むべきです」と報告するわけです。

こういう斥候に出された人たちが報告をする際には、そこがどんな土地であり、神がどういう用意をしてくださったかの報告の他に、そこには強い人々がいるので私たちの力では無理でしょうと付け加えた報告をしている、言い換えれば、神が与えてくださったものに対して、私たちの私情を挟んで地上の価値観によって、でもそれは無理でしょう、もう少し待った方が良いでしょうとか、色々なことを考えてしまう。このようでは神のみこころに従ってはいないことになるのです。²⁶³

「それでは、安息を与えてやると約束したのに不従順だったから、神の約束は無効になってしまったかと言うと、決してそうではない。『今でも神の安息に入ることはできると聖書は私たちに約束をしてくださっています』」。そしてヨシュアはその約束の地カナンに入ったけれども、そこではまだ完全な形で神の約束は成就されてはいなかった。つまり、そのカナンの地は永遠の安息のひな型として示されているのです。

「だから私たちが、『心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くして』神に集中して神を礼拝し、神と共にある時にこの約束は完成されていくのだ。神はかように、終わりの日に向かって近づいて行くよう召してくださるのだ」と語られていきます。神の約束は今なお具体的な形で、この歴史の中で次第に明確になりつつあるのです。それを見つめ続けていかなければいけないのではないのでしょうか。263

「平和」が、この国で一つの大事な方向性を与える言葉として与えられてからもう戦後51年過ぎました。そして、私たちを取り巻いている状況は、平和ということとはどんどん引き離されてゆきます。神が与えてくださる絶対的な平和に対して、私たちは信頼をしてその御方の恵みの中で、自分の力に頼ることを止め、平和を作り出すために生きてゆきましょうと決心をしたのです。

その決心は、この国の憲法の前文にちゃんと書いてある。ところが、平和を維持するために軍隊を派遣しましょう、と国は言い始めているわけです。そこで言う平和は、神の平和ではないのです。人の力関係によって平和は成り立つという論理に立ってる、完全な自己と神との分裂がそこにはあるのです。そういう思想の中に平和は成り立って来ない、神だけに寄り頼むことができなくなって、自分の力や知恵によって平和が作れると考え出した時、私たちは神を捨てるのです。神を捨てたところに安息はない。そのことを本当に考えるようにという深い神の憐れみが、このヘブライ人への手紙を通して私たちに、「安息を求めていきなさい」という呼びかけとなって現されているのです。（国会の前でデモ隊とは離れて独り祈られた先生の実践力はこの信仰の基盤に立つ行動であられたと偲びます）

私たちの周りに起こっている様々な出来事を考えると人間の力は、知恵は、そして今日の科学は、すごく進歩したと言っているのですけれども、どんなにそれが、ずさんであり自己讃美でしかなかったかということは、0-157*1で明確なのです。病原菌が何から伝わったか判断が明確に検証できない、進んだ医学で対処したけれども、死んで行く人をどんどん作り出す以外に医学は手をつくすことができない現実があります。「あなたがたの力は限界があるのです」と呼びかけて、「本当の安息が何であるか、もう一度自分が今までして来たことを全部止めて静かに聖書の前で考えなさい」と神は呼びかけているのです。

でも、止められないですね、どうしても自分たちがと考えている。カイワレダイコンが被害者になったのですが、何でカイワレダイコンになったのかなと考えると、これが究極的な犯人でないと知っている厚生省が保障が一番安くて済むものを選んだのではないかと考えられるのです。とにかく、それが何が原因でそうなったかを見分けることができないほどに、私たちのもっている科学や、知識や、知恵というものは破れた状態でしかありません。

そんなことであたかも世界を支配することができると思っていること自体がすごく滑稽なのだ、今度の出来事は私たちに教えてくれたのではないかと思います。

「本当の安息」は、死を超えてよみがえってくださったイエスしかもっておられない、

だから、その御方と一緒にいる時にしか、私たちのものにはならないのではないのでしょうか。そしてその御方は一切の業を止めて休んでいらっしゃるから、私たちも一切の業を止めて休まなければならないと思います。この世における一切の思いをかなぐり捨てて、神の言葉だけに忠実に聴いて行くことができるような人生、再臨のイエスを仰ぐ終末期を与えられる時、「本当の平安」が私たちを包んで行くのだと思います。その日が、何時になるかわかりません。その日が来る前に裁きの日が来るかもしれません。そうすると大変なことになるわけですから頑張っ、努力をして「本当の休み」を作りたいなと思います。
(1996年8月10日)

*1 O-157事件(オウ・イチゴウナナ) 1996年(平成8年)7月、大阪府堺市で起きた給食中毒事件。給食を食べた子が次々と発症。児童7892人を含む9523人の方々が罹患し、3人の児童が尊い命を失いました。後にそれがO-157という細菌からくるもので、時には腸からの深刻な出血を伴い死に至るという「殺人細菌」として恐れられていました。しかも、児童が食べた食材を詳しく検査した結果、当時まだ一般的な野菜ではなかった「カイワレ大根」に菌が付着していたという結論が報告され、あっという間に市中からカイワレがなくなりました。「カイワレ大根」犯人説はまったくの冤罪だったのです。当時の菅直人厚生大臣が必死でカイワレを大量に食べ、安全性を宣伝しました。翌年、羽曳野の南野農園というカイワレ業者が、国を相手に損害賠償の訴訟を起こしました。裁判では、集計に不正確なところがあり、カイワレが原因食材であることが確定的な事実だという印象を与えたのは注意義務に反するという理由で、南野農園側が勝利。大阪高裁、東京高裁ともに南野農園が勝利し、後に最高裁でも確定しています。報道と実態がかけ離れてしまうという意味でも忘れられない事件である。

写者あとがき

今回も内心の自己がズキズキと痛むところが沢山ありました。安息を願い求めながら、安息の意味も分からず、安易に「安息」という言葉を使っていたことを悔い改めます。特に写している2022年3月は2年間を超えるパンデミック・COVID-19の中にあり、ウクライナが戦場となり加えて温暖化による気象変動の恐怖に晒されながら、平和の祭典というオリンピック・パラリンピックが行われました。多くの混乱と対立、不安と困惑が世界に漂っています。まさに裁きの時を覚えねばなりません。受難と復活の季節になり、静かに深く正しく祈る力が与えられますように、目を覚まします。3月13日小田原十字町教会にて初めて礼拝を賜りました。